

『巨人(おおびと)の足跡』

今は昔、神様が、世の中に、たくさん、居られたときのお話です。田には、田の神様が…、山には、山の神様が居ました。私たちが、子どもの頃、寺から、後ろの山へ通じる道がありました。真夜中、コーンコーンと、キツネの鳴く声が、闇にこだまして、神秘的な山の精霊(しょうりょう)の声のように思えたものです。



しかし、今は、田に、神様の姿なく、山にも、神様が姿を消した。川は、ドブ川と化して、魚も住めず、どうしたことでしょうか。人々の心の中にも、神が住めなくなったのでしょうか。

昔、田植えは、祭事(まつりごと)でした。苗を植えさせて頂く、神様への厳粛な家の、大切な行事でした。田植えに奉仕された人々が、田の神様の栄光をたたえて、赤飯のもてなしを受けたものです。

江曾山と、五箇山(ごかやま)の奥山の中腹に、大きなくぼみがあります。

昔、江曾は、越蘇郷(えっそごう)と呼ばれていました。それよりも、もっと昔、「手長足長命(てながあしながのみこと)」という、大きな神様が、石動山から江曾山にかけて、住んで居られました。この神様のもとに、七軒の家の人たちが、山の中間のあちこちに、細い煙をあげながら、暮らしておりました。「江曾七軒」と称し、江曾町の元祖といわれています。(九郎右エ門、次郎左エ門、吉左エ門、助左エ門、彦左エ門)これらの人々に、かの命(みこと)は、山の幸、海の幸を与えようと、堂の上にかけて、両足を踏ん張り、長い間考えました。山には、緑の木々を…、海には、たくさんの貝や魚を…、そして、人々には、神の心を与えました。

そのおかげで、村には、人も増え、和やかな神の心が、村をつつみ、今時の繁栄をみることができました。この命が、踏ん張った足跡を、「巨人の足跡」と、村人たちが呼んでいます。

(江曾町伝承、妙楽寺)